

CeMI 気象防災支援・研究センター  
*News Letter*

## Contents

1. 梅雨明け
2. 線状降水帯の予想について
3. お天気よもやま話  
～ 早期注意情報(警報級の可能性)について

## 1 梅雨明け



7月に入って梅雨もいよいよ後半になりました。梅雨前線に伴って雨の降る量も多くなって来ます。毎日の曇雨天や蒸し暑さが続くと、そろそろ梅雨明けが待ち遠しくなります。

梅雨入りと梅雨明けを比較すると、気象台への問い合わせは梅雨明けの方が多く、7月に入った頃から問い合わせが多くなって来ます。長く続く梅雨空から夏空への期待が大きいからでしょうか。梅雨入りや梅雨明けは、週間天気予報や季節予報を担当する何人もの予報官によって、向こう1週間程度の天気の経過の予想をもとに検討が行われますが、梅雨明けでは特に雨を中心とした防災上の視点がポイントとなります。

梅雨入りは「これから雨のシーズンが始まり、雨の降り方に注意してください」というように、大雨への注意を喚起する防災上重要な役割があります。一方、梅雨明けは「雨のシーズンが終わり、暑い夏がやって来ます」ということではありますが、梅雨明けの発表によって雨

への注意が低下するという心配もあります。“梅雨明け10日”といった言葉もありますが、梅雨が明けたからといって、安定した暑い晴天が1週間も10日も続くことはむしろ珍しく、“戻り梅雨”と言われるように、梅雨明け後も不安定な天気が現れ、時として強い雨に見舞われることもあります。

梅雨が明けると、それまでのような梅雨前線付近での大雨といったことはなくなりますが、梅雨期と同様に下層の非常に湿った空気による大雨の危険は梅雨期に比べて低くなるわけではありません。梅雨明け後、盛夏期である8月にも大雨による災害は頻繁に起こっています。最近では、3年前の令和3年8月中旬に西日本から東日本の各地で大雨が続き、広島県や福岡県、長崎県の3県に大雨特別警報が発表され、土砂災害などで13人の方が亡くなりました。また、翌令和4年の8月初めには北陸地方と北日本で大雨が降り、山形県と新潟県に大雨特別警報が発表され、洪水や土砂災害などの被害が出ました。

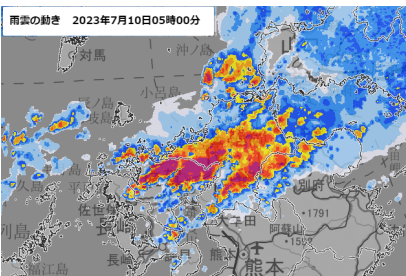
梅雨明けはあくまでも季節の推移の中での“ひと区切り”に過ぎません。この時期になると南海上から台風や熱帯低気圧が近づいて来ることがあります。梅雨が明けたあとも、大雨に対する警戒を怠ることはできません。





## 2 線状降水帯の予想について

7月になると中旬から下旬にかけて九州から東北へと順に梅雨が明けていきますが、梅雨が明ける前は、最も大雨の降りやすい時期とも言えます。昨年も7月7日から10日にかけて、九州北部地方や中国地方を中心に大雨となりました。この大雨では、島根県や福岡県、佐賀県などで線状降水帯が発生しています。図は、線状降水帯が発生した時の気象レーダーの画像です。この時に限らず梅雨末期の大雨の時は、よく線状降水帯が発生します。線状降水帯が発生すると、その付近で集中して大量に雨が降るため災害発生の危険度が急激に高まります。



2023年7月10日5時の気象レーダー画像  
(出典: 気象庁HP)

ところで、線状降水帯の予想はどのようになっているのでしょうか。気象庁では、線状降水帯による大雨の可能性のある程度高いと予測できた場合に、半日程度前から「線状降水帯」のキーワード

を使った気象情報で警戒を呼びかけています。線状降水帯の予測が適中するのは、4回に1回程度とされています。この要因としては、線状降水帯発生詳しい仕組みなどが解明されておらず、正確な予測が難しいことがあげられます。一方で、この呼びかけがあった場合は、線状降水帯発生の有無に関係なく、大雨の可能性はかなり高い状況ですので、大雨に対する心構えを一段と上げる必要があります。

さて、気象庁では線状降水帯の予測精度を向上させることに力を注いでいます。新たな予測技術の活用や観測の精緻化等への取り組みによって、年々予測精度は良くなっています。その一つの成果として、これまでは地方単位（例えば関東甲信地方）で線状降水帯による大雨の半日程度前からの呼びかけをしていたのですが、今年の5月27日11時から府県単位（例えば、神奈川県と千葉県）に絞り込んで呼びかけを行うことを始めました。とはいえ、精度が格段に向上したわけではないので、実際に大雨となってきたら、キキクル等で危険度を確認して早め早めの判断・行動をするよう心がけましょう。

## 3 お天気よもやま話 ～早期注意情報（警報級の可能性）について

早期注意情報（警報級の可能性）は、5日先までに警報級の大雨等になる可能性があるかどうかを確認できる情報です。翌日までの早期注意情報は1日3回（5時、11時、17時）天気予報の対象地域と同じ発表単位（〇〇県南部など）で発表されます。また2日先から5日先までの早期注意情報は、週間天気予報の発表（毎日11時、17時）に合わせ、週間天気予報の対象地域と同じ発表単位（〇〇県など）で発表されています。発表は[高]・[中]・可能性[なし]の3段階。[中]が発表されたときは、可能性は高くないものの、命に危険が及ぶような警報級の現象となり得ることを表しています。これをもって直ちに避難等の対応をとる必要はありませんが、例えば深夜等に天気急変して突然警報が発表されても慌てずに対応できるよう、あらかじめ心構えだけは高めておく、といった活用が考えられます。一方[高]が発表されたときは、危険度が高まりつつあり、「警報に切り替える可能性が高い注意報」や「予告的な府県気象情報」がすでに発表されているか、まもなく発表されることを表しています。気象庁ホームペー

〇〇県〇〇の早期注意情報（警報級の可能性）									
〇〇〇〇年〇月〇日13時 〇〇地方気象台 発表									
〇〇では、4日までの期間内に、大雨警報を発表する可能性が高い。									
〇〇県〇〇	3日		4日			5日	6日	7日	8日
	12-18	18-24	00-06	06-12	12-24				
警報級の可能性	[高]	[中]	[中]	[中]	[中]	-	-	-	-
大雨									
1時間最大	50	40	40	30	25				
3時間最大	70	60	60	45	35				
24時間最大				50から100					

早期注意情報発表例(出典: 気象庁X)

ジで気象警報・注意報等を確認し、警報級の現象が予想される詳細な時間帯がいつになるのかチェックしましょう。

早期注意情報は「大雨」「大雪」「暴風（暴風雪）」「波浪」「高潮」に関して発表されますが、「大雨」と「高潮」に関して[高]または[中]が発表されている場合は、災害への心構えを高める必要があるとされる警戒レベル1になります。最新の防災気象情報等にもままして気をつけ、災害への心構えを高めてください。

早期注意情報は、気象台の予報官の胸の内を知ることができる情報とも言えそうです。大雨のシーズンに、ぜひご活用ください。



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22口ーヤル若葉105号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ [advisory@npo-cemi.com](mailto:advisory@npo-cemi.com)

